

● 漢方研究会レポート

南大阪女医ネット漢方勉強会



南大阪女医ネット漢方勉強会は、梅沢医院 高津尚子先生(堺市)を世話人として、漢方をより日常診療に役立てようとされている南大阪の女性医師が集まり、2ヵ月に1度開催されている。講師は東洋堂土方医院 土方康世先生(茨木市)が担当され、「中医学の基礎」(東洋学術出版社)をテキストに勉強会を進めるとともに、会員の先生方からも自験例等の紹介が行なわれている。土方康世先生は関西医科大学を卒業され、同大学の内科研究員としてご活躍の後、昭和55年に開業された。漢方は特に中医学に習熟され、海外誌にも投稿されるなど漢方医学の国際化にも目を向けて活躍されている。

高津先生は本会に対する想いを次のように述べられている。

『われわれ女医ネットは偶然のような必然の出会いや巡り合いにより、楽しく回を重ねてまいりました。大阪大学工学部卒業で工学博士でもある土方先生は、2人分の人生経験を持たれているかのような先生で、国際的視野にたって後輩を導いていただいている。参加者も内科、小児科、産婦人科、皮膚科、心療内科、麻酔科と多岐にわたり、勉強会の随所で他科の最近の知識も学ぶことができ、1回の集まりで得られる内容の充実度は他の会の比ではありません。それは一方的な講義だけでなく、その時に最も良い方法で会を行なうという柔軟な考え方の『女医の会』ならではと考えています。しかしながら、女医であるがゆえの多忙な日程の中で、何とか時間を調整しながら出席して下さっています。であればこそ意気込みもあるのでしょうか。また、会終了後の有志の懇親会では深夜まで、漢方からはじまり最新医療、代替医療そしてまた医療以外の話題まで、人生を熱く語り合いながら親睦を深めています。これからもどんどん進化しながら、女性同士の有益な交流の場で症例の検討を積み重ね、漢方の発展に少しでも寄与できるようにと大きな理想を掲げています。』

今回は平成16年9月25日(土)に開催された第12回勉強会のテーマ「四診」のうち、舌診および脈診に関して土方先生の自験例を交えた講義内容を紹介する。

東洋堂土方医院 土方康世

舌写真：淡白舌・歯痕・瘀点・潤滑(神戸中医学研究会編著：中医臨床のための舌診と脈診 p12)と同じような舌所見を経験した。

症例 52歳、男性

腎孟腎癌術後で再発予防を希望して9月28日当院受診。

稍暗い感じの舌体で歯痕があり、舌体に数個瘀点を認め舌下静脈も稍怒張。苔は膩で稍黄。

脈は左右とも弦で、右が稍滑。

舌診と脈診より先ず弁証すると、稍暗い舌体で歯痕があること、また手術で耗氣していることから、脾氣虚による湿滞が考えられる。膩苔も湿滞を裏付けている。稍黄は真夏であれば季節的に病的とは言えないが、9月末であることから稍胃熱があると考えられる。退院直後のことで抗生物質や抗癌剤の影響が考えられ、脾氣虚、湿痰の化熱による黄苔と想定される。弦脈、滑脈は湿痰の存在と矛盾しない。癌の手術というストレスによる肝鬱、肝失疏泄等の弦脈も考えられる。舌体の瘀点、何となく暗い感じ、舌下静脈の黒っぽい怒張から血瘀が考えられる。一方、問診では耳鳴りがあり、一応食べてはいるが以前ほどの食欲は無く、お茶をよく飲む、できれば冷たいお茶が良い、以前から肩こりがひどく、狭心痛や動悸があったなどの訴えがあり、瘀血体质であることがわかる。

以上、舌脈所見と臨床症状が非常に良く合致している。しかし、全てがこのように合致しているとは限らない。やはり舌脈は問診の参考とする。病態の変化しているときは舌脈と臨床症状が矛盾することもある。